



WACCA

MONTHLY REPORT



5月の あそび基地！

! Hello!

大人鯉のぼりの上に、
子どもたちが作った
カラフルな子ども
鯉のぼりを鱗にして



このような機会を作ってく
ださった皆さんに今日は感謝の
気持ちでいっぱいです。
ありがとうございました。

(参加されたお母さんより)

WACCA あそび基地

5月の「あそび基地」は、8名の子どもが参加しました。先月とはまた違った顔ぶれで、新しいWACCAは初めてという子もいました。

一心不乱に二時間集中してレゴに取り組んだ4歳児、自分より小さい子を上手にリードする小学5年生、かわいいダンスでみんなを笑わせてくれた3歳児など……。もちろん他の子たちの輪には入らない子もいました。そういう子も、メダカの水槽に興味深そうにジッと見つめて、メダカやエビの数を数えたり水草を観察したりと、それぞれの楽しみ方で時間を過ごしていました。

今月は、大きな鯉のぼりに子どもたちが作った小さな鯉のぼりを鱗のように貼って、一枚の作品を制作しました。隙間という隙間にシールを貼る子や、絵を描いた子もいて、見ていて明るい気持ちになります。

一回のあそび基地で劇的に何かが変わるというわけではありません。しかしこれから回数を重ねていく中で、子どもたち大人たちの間にどういった化学反応が起こるのか、それを見ていくのが楽しみです。

ふらっとシンママカフェ

子どもたちがあそび基地を楽しんでいる間、お母さんたちはシンママカフェに参加しました。

ここでは、シンママたちがスタッフの司会の下、近況を語りあったり困り事を相談したりすることができます。ルールは、「話したことはその場限りにして持ち帰らないこと」です。5月28日のカフェでは、はじめは少し緊張した雰囲気がありましたが、やがて「アプリや万歩計を使ったりフレッシュ」や「学校とのお付き合いの中で経験したこと」など、さまざまな話題が盛り上がり、参加者たちは経験や知恵を共有していました。

また、それぞれが普段言えない胸の内も語り合いました。辛い経験が体に与えた影響など、皆が自分だけかもしれないと思っていた体験には、他の人とも共通する部分がたくさんあることがわかりました。

参加した人からは、気持ちをわかってもらえる場が今までずっとなく、自分がおかしいのかと思っていた、同じ思いの人がいることがわかって嬉しいという声もあがりました。

5.14 てつがくカフェ 開催



「哲学」とは言っても、アリストテレスやカントの理論を熱く語るでもなく、孔子の教えを拝聴するでもなく、WACCAの「てつがくカフェ」は、茶話会形式でゆる〜く語り合う場です。

前年度までは祝祭日の午後で開催していたのを、奇数月第二土曜日の午後に変更して初めてのカフェで、参加者は9名でした。

今回のテーマは「“NO”と言える／言えない」と「人の言いなりにならない」でした。

自分にとって「嫌だな」と思う場面に出くわした時に、「NO!!」とハッキリ言いきれぬ人もいれば、うまく言えない人もいます。

ただ、WACCAに集まる人は、「誰かに嫌な思いをさせたくない」と思うタイプが多いせいか、「NO」と言って即座に拒絶するのではなく、「その場から離れる」「そんな相手から距離を取る」などと、相手と衝突せずに済ませられる方向で考えていく…という流れになったのが、WACCAらしさだと思いました。

普段、自分に近い女性たちだけで繋がる事が多いため、知らず知らずに考えに偏りが出てきてしまうのですが、それぞれの個性や生活環境の中で導き出される様々な意見を聴いて、色々と学ばせて頂きました。

ちいさな読書会より

『わたしがテピンギー』

中脇初枝 (著), あずみ虫 (イラスト)

出版・偕成社



… あらすじ …

母親と父親を亡くし、意地の悪い継母と一緒に暮らす少女テピンギー。

テピンギーを疎んでいる継母は、森で出会った男と取引をして、テピンギーを召使いとして売り飛ばそうと目論みましたが…その密談を聴いていたテピンギーは、知恵を働かせて男を困惑させ、うまく乗り切ることができました。

… 感想 …

昔話の主人公といえば、大抵は男の子で、しかも多くの場合は暴力で問題解決を図ろうとする内容が多く、女の子が主人公だと「いつか王子様が…」と他力本願な内容が多いと思います。

でも、この絵本の主人公テピンギーは、王子様を待つのではなく、自ら行動する少女でした。しかも、暴力に頼る事もなく、知恵と友人たちの助けだけで危機を乗り切りました。

テピンギーの頭の良さと行動力には拍手喝采です。

いざという時に、理由も訊かず、何の見返りも求めず、善意だけで一緒に行動してくれる友人たちを何人も持っていた事が、テピンギーの本当の財産なのかもしれません。

笑顔で本を読み終えた後、ふと、「私には、いざという時に駆けつけてくれる友人はいるのかな?」「私は、誰かが困ってる時に即座に手を出せるのかな?」と考えさせられる一冊でした。